

## 口唇閉鎖訓練が構音機能、摂食・嚥下機能に及ぼす効果

新潟リハビリテーション病院・

佐藤卓也, 佐藤厚, 崎村陽子

新潟医療福祉大学 言語聴覚学科・

志村栄二, 今井信行, 吉岡豊, 糟谷政代

### 【背景と目的】

脳血管疾患の後遺障害において、口唇閉鎖力の低下は構音障害や摂食・嚥下障害と密接に関連する。しかしながらその詳細は不明であり、特に口唇閉鎖力の変化を訓練効果の指標として用いた研究も乏しい。本研究では、脳血管疾患発症後に後遺した構音障害、摂食・嚥下障害例を対象とし訓練期間前後における口唇閉鎖力と構音障害および摂食・嚥下機能との関係を検討することを目的とした。

### 【対象と方法】

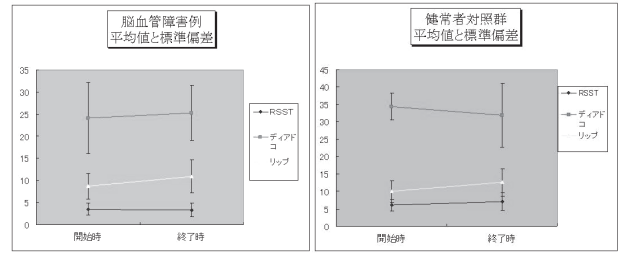
対象：脳血管障害例6例（男性3例，女性3例，平均年齢54.5才±13.6才）。健常者対照群9例（男性3例，女性6例，平均年齢42.4才±22.3才）であった。

方法：メディカルタウン社製訓練器具「メディカルパタカラ」を装着し口唇閉鎖訓練を1回3分，1日3回，30日間継続した。脳血管障害例の訓練開始時期は、発症から1～2カ月の時期であった。口唇閉鎖力はコスモ計器社製口唇閉鎖力測定器「LIP DE CUM®(LDC-110R)」(リップデカム)を用いて、訓練開始時，および30日間の訓練終了時に測定し比較検討した。同時に構音反復動作（オーラルディアドコ）の指標のひとつで構音点が口唇である/pa/音の5秒間総回数を，竹井機器工業社製「健口くん(T.K.K. 3350)」を用いて測定した。同じく，嚥下機能の測定として反復唾液嚥下テスト(repetitive saliva swallowing test;RSST)を試行した。以上3つの測定値を比較検討した。

### 【結果】

脳血管障害例：「口唇閉鎖力」開始時平均値 8.68N±2.90，終了時平均値 10.90N±3.66。「オーラルディアドコ」開始時平均値 24.10回±8.02，終了時平均値 25.21回±6.30。「RSST」開始時平均値 3.50回±1.37，終了時平均値 3.33回±1.50。

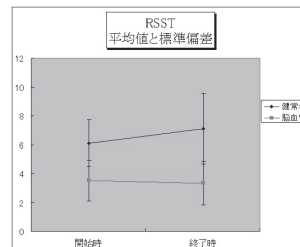
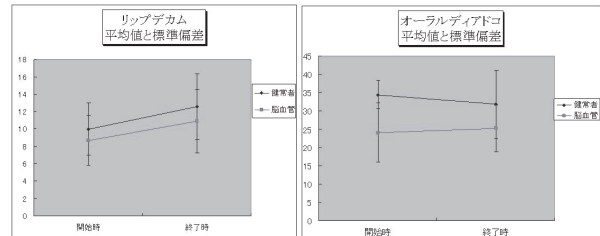
健常者対照群：「口唇閉鎖力」開始時平均値 9.98N±3.03，終了時平均値 12.58N±3.79。「オーラルディアドコ」開始時平均値 34.40回±3.90，終了時平均値 31.81回±9.18。「RSST」開始時平均値 6.11回±1.62，終了時平均値 7.11回±2.47。



「口唇閉鎖力」の結果からは、脳血管障害例と健常者対照群間に有意差はみられなかったが、両者とも開始時と終了時の間に有意差がみられた。

「オーラルディアドコ」の結果からは、脳血管障害例と健常者対照群間に有意差はみられず、両者とも開始時と終了時の間にも有意差はみられなかったが、脳血管障害例では改善傾向がみられた。

「RSST」の結果からは、脳血管障害例と健常者対照群間に有意差がみられた。両者とも開始時と終了時との間には有意差はみられなかったが、健常者対照群では改善傾向がみられた。



### 【考察】

「口唇閉鎖力」による測定の結果から「メディカルパタカラ」による口唇閉鎖訓練は効果があると考えられる。口唇閉鎖力が向上することは構音や嚥下などの運動機能の改善に波及効果があると思われるが、今回の結果からは明らかな証拠は得られなかった。今後も症例を蓄積して検討したい。

### 【結論】

「メディカルパタカラ」による口唇閉鎖訓練は口唇閉鎖力の改善に対して効果が期待できる。

(本研究は新潟医療福祉大学研究奨励金により実施された)